

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00293

研究課題名（和文）「負け方」の問題 戦後日本における敗北の語りの歴史的分析

研究課題名（英文）The Problem of "How to Defeat": A Historical Analysis of the Narratives of Defeat in Postwar Japan

研究代表者

五味 典嗣 (GOMIBUCHI, NORITSUGU)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：10433707

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、主にアジア太平洋戦争末期から1970年代にかけての文学・映画・ノンフィクション作品を対象に、戦争における日本国家の敗北と、新しい時代としての「戦後」の始まりを語る枠組みの生成と変化について検討した。その結果、（1）空襲下の日本社会に拡散した人種主義的な不安を語る言説が戦後の国民主義的なナショナリズムの土台となったこと、（2）メロドラマやミステリなどの大衆的なジャンルにおいて、戦後日本の空間的境界を上書きする物語が多く生産されていたことを明らかにした。加えて、（3）日本敗戦を昭和天皇と早期和平派の政治家の「合作」と位置づける認識の枠組みが1960年代に定着していたことを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

- （1）日本近現代文学研究の手法を用いて、広く日本社会の「戦争の語り」の枠組みの生成過程を歴史的に検証したこと。
- （2）日本語のコンテキストの中で、帝国日本から戦後日本への屈折と断絶をはらんだ移行がどのように表現されたかを辿り直すことで、戦後日本の脱帝国化・脱植民地化が不十分に終わっていくプロセスを内在的に検討したこと。
- （3）同時代の資料を活用して、世界史的な転換点の一つである「1945年」を日本社会がいかに経験したかを捉え返すことで、同じ時間を生きた人々、とくに帝国日本の旧植民地・支配地域をはじめとする諸地域の人々の経

研究成果の概要（英文）： In this study, I focused mainly upon literature, films, and nonfiction works from the end of the Asia-Pacific War to the 1970s and examined how the defeat of the Japanese state and the beginning of the "postwar period" as a new era were described. The following three points were clarified. (1) The discourse that speaks of the racialized anxieties that prevailed in Japanese society under the air raids became the foundation of nationalistic nationalism after the war. (2) In popular genres such as soap operas and mysteries, many stories overwriting the spatial boundaries of postwar Japan were produced. (3) The recognition framework that positioned Japan's defeat in the war as a 'collaboration' between Emperor Hirohito and politicians who supported early peace was established in the 1960s.

研究分野：日本文学

キーワード：戦争記憶 日中戦争 アジア太平洋戦争 戦争文学・戦記文学 戦争映画 東アジア アダプテーション ナラティブ

1. 研究開始当初の背景

日本敗戦後の言説の場では、帝国日本はなぜ・いかにして「先の大戦」に敗北したかがくり返し問題化されてきた。文学作品、映画、一般向けの歴史書、テレビ・ドキュメンタリーなど複数のメディアで、主に1942年以降の敗北のプロセスがつぶさに辿られ、吟味され、議論されてきたのである。こうした言説や表象の蓄積は、戦後日本社会における戦争の語りには大きな影響を与えてきた。例えば、戦局の展開を個々の軍事指導者の選択と判断の積み重ねと見る発想は、戦争や戦場での「たら・れば」を問題化する架空戦記的な想像力の土壌となるだけでなく、社会的言説としては組織論・リーダー論として読みかえられ、ビジネス書が好んで取り上げるトピックとなっていく。こうした事例に鑑みても、「先の大戦」を失敗と過誤の連続として捉える言説は、戦後日本の戦争記憶の語りの中で巨大なサブジャンルを形成してきたと言ってよい。

こうした観点から行われた先行研究としては、戦後日本の文化を「敗戦のトラウマ」という観点から論じた五十嵐恵邦『敗戦の記憶』(中央公論社、2007年)と橋本明子『日本の長い戦後』(みすず書房、2017年)が注目される。五十嵐は日本敗戦から1970年代までの文学作品と大衆文化を、橋本は1980年代以降の新聞論説と教科書記述をそれぞれ俎上に載せたが、精神分析的な術語を援用する議論では、トラウマの主体としての「日本」「日本人」があらかじめ前提化されてしまうおそれがある。本研究では、あくまで言説と表象が作り上げる認識の地平の歴史性を重視することで、国民主義的な境界設定自体を問い直すことを企図した。

2. 研究の目的

酒井直樹は、アジア太平洋戦争での敗北によって帝国日本の制度的な枠組みは解体されたものの、戦後日本社会の人々の帝国意識・植民地主義的な意識は十分には相対化されなかったと指摘している(酒井『ひきこもりの国民主義』岩波書店、2017年)。本研究では、この酒井の問いを、戦後日本における敗戦の「語り方」を通じて検討することを旨とした。

具体的には、本研究では、戦後日本における敗北の語りや、問題をアジア太平洋戦争の開戦過程や戦争指導の問題に局所化することで、日本近代の基本的な方向性が容認・肯定され、戦前・戦時期の帝国主義的・植民地主義的な思考や発想自体を総体として問題化する回路を閉ざしていったことを指摘した。さらに、上記のような「先の大戦」の敗北の意味合いを限定していく言説を通じて、戦後日本のナショナリズムが戦前・戦時・戦後という段階性をいかなる論理とイメージにおいて合理化され、「先の大戦」の本来的な総括が妨げられてきたかを、複数のメディアそれぞれのコンテクストに配慮しながら、学際的・領域横断的に検討しようと試みた。

3. 研究の方法

本研究の方法的な特質としては、検討の対象を「戦争の記憶」一般ではなく、「先の大戦」の敗北をめぐる語りや表象に限定したこと、これまで日本近現代文学研究が培ってきた調査と分析の手法を援用し、脱構築的な分析を通じた批判的な検証と再考を行ったことが挙げられる。また、こうした分析を出発点としながら、列島各地の図書館や資料館等が継続的に集積してきた戦争体験・戦場体験にかかる聞き取り資料、文集、日記との比較を行うこと、戦争と平和をテーマとする記念館・博物館等での歴史実践との照応関係を検証することを通じて、同時代で語られていた敗北の語りや枠組みと、人々の記憶の意味づけ方との相関にも視野を広げた。

以上に加えて、戦後日本社会における敗北の受け止めと、冷戦体制下で列島社会とは異なる経験を積み重ねていった沖縄・台湾・韓国といった地域での「ポスト1945年」に対する理解とを比較することで、いわゆる「一國平和主義」的な認識枠組み自体を相対化できるように配慮した。

4. 研究成果

新型コロナウイルス禍の影響が長びいたことで当初の研究計画の部分的な変更を余儀なくされたが、補助事業期間中におおよそ次のような成果に到達することができた。

(1)「敗北の語り」の生成と受容の回路。一部の軍人や知識層に帝国日本の敗北が真剣に意識されるようになった1943年5月以降から戦後占領期にかけての文学・映画を取り上げ、初めて経験する近代戦争の敗北がどのように語られ、意味づけられ、社会的に受容されていったかを集中的に検討した。

とくに、帝国日本から戦後日本への境界の変更、多民族が構成する帝国の中心的主体から国民主義的なナショナリズムへの転換が、どんな語りやイメージを通じて合理化され、あたかも自明で自然なプロセスとして表象されていったかを検討する中で、「日本」を美学化されたコメ作りの生活として再定義することで「敗北」の定義自体を動かしてみせた保田與重郎と、「戦後」という新しいプロジェクトへの投企を呼びかけることを通じて「敗北」の総括を前近代/近代という二項対立の物語へと転位させた丸山眞男の言説が果たした役割に注目した。さらに、戦時末期の治安維持担当部局が集積していた「流言蜚語」の記録の調査と分析を通じて、戦時末期の空襲下において列島内の朝鮮人に対する不信と差別感情が昂進しており、こうした心性が戦後日本

の国民共同体を支える基体となったのではないかと論じた。以上の研究成果は、2023年11月に単著『「敗け方」の問題 戦後文学・戦後日本の原風景』（有志舎）として刊行した。

関連して、横光利一の小説「微笑」（1948年）の分析を通じて、戦時末期の日本で行われた軍事研究の記憶が、サブカルチャーを含む戦後の言説空間に亡霊のように召喚され、語り直されていった様相を明らかにした。

（2）「敗北の語り」の定着と再生産。戦後日本における「敗北」の語りの定着期として、1960-70年代に注目、文学・映画・ノンフィクション作品・テレビドラマ等のジャンルを横断的に調査することで、「敗北」の語りの枠組みの再生産と同時代の米日関係、東アジア情勢とのかかわりについて検討した。

とりわけ、「戦後20年」の年に、大宅壮一編として最初のヴァージョンが刊行されたノンフィクション『日本のいちばん長い日』（1965年）の二度にわたる映画化をめぐって、アダプテーション研究の手法を援用しつつ、それぞれの作品で天皇と内閣・軍人との関係がどのように表象されているか、日本敗戦の政治過程の中で何が中心化され、どんなエピソードが排除されているかを集中的に検討した。とりわけ、2015年公開の原田真人監督版については、1990年代以降の天皇の戦争責任をめぐる研究の進展を踏まえつつ、戦争終結に果たした昭和天皇の政治的な役割を協調することで、結局のところ「戦後70年」の総理大臣談話の論理を正当化する物語となってしまうことを指摘した。

関連して、占領期から1950年代に発表された政治家の回想や手記と小説・映画における「1945年8月」の語りとを比較し、とくに昭和天皇表象にかんして行った調査と分析の成果を公開シンポジウムの席上で報告した。

（3）「敗北の語り」の現在形。現代の表現者たちが「先の大戦」、とくにアジア太平洋戦争末期の社会と人々のありようをどのように表現しているかについて、資料の集積と調査を行った。とくに、近年注目すべき作品の発表が続いているエンターテインメント系作家の戦争小説や、美術・アートパフォーマンスの領域での実践を取り上げ、それらの表現の傾向と特質にかんする分析を行った他、過去の日本の戦争と現在進行形で継続するウクライナやパレスチナでの戦争とを架橋する実践をめぐって検討を行い、実際の表現者と対話する機会も設定した。

また、1945年の日本敗戦を比較史的な視座から再審するために、いわゆる「引き揚げ」にかかる表現を含め、1945-1960年の沖縄・台湾・朝鮮・中国の経験に取材した文学作品（翻訳を含む）と映画を積極的に調査し、日本列島の経験との差異について考察を行った。いまのところ、これらの研究活動を通じて集積したデータや資料をもとに着想した新たな研究課題で、科研費への応募を予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 五味淵典嗣	4. 巻 21
2. 論文標題 徹底討論『微笑』報告を終えて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 横光利一研究	6. 最初と最後の頁 70-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 五味淵典嗣	4. 巻 199
2. 論文標題 帝国の残響 横光利一『微笑』再読	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 114-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 五味淵典嗣	4. 巻 72
2. 論文標題 「八月一日」表象の政治学 『日本のいちばん長い日』映画化をめぐる	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 学術研究 人文科学・社会科学編	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 五味淵典嗣	4. 巻 52-5
2. 論文標題 国語教科書の中の「戦争」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 140-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 五味湊典嗣
2. 発表標題 幻影の強度 横光利一『微笑』を読む
3. 学会等名 第22回横光利一文学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 五味湊典嗣
2. 発表標題 接触領域としての戦場 日中戦争期戦記テキストにおける他者の表象
3. 学会等名 東アジア日本研究者協議会第6回国際シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 五味湊典嗣
2. 発表標題 終末のスペクタクル アジア太平洋戦争期のメロドラマ的想像力
3. 学会等名 合同研究集会「 国民（ネーション） を縫い直す 貫戦期におけるメロドラマ的想像力の歴史的位相」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 五味湊典嗣
2. 発表標題 聖断 の表象 1945-1955
3. 学会等名 シンポジウム「貫戦期の東アジアにおける映画と諸芸術 1940年代から1950年代にかけて」
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 五味洵 典嗣	4. 発行年 2023年
2. 出版社 有志舎	5. 総ページ数 306
3. 書名 「敗け方」の問題 戦後文学・戦後思想の原風景	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------